

[特集Ⅱ]

第4コース

高校生を対象とした「人の行動を考える」
視点を養う教育実践(2)

坂本 剛*・小池 はるか**
朴 賢 晶***・吉田 俊 和****

1. テーマ
2. 実施経過
3. レポートのテーマ
4. 全体的なまとめ

1. テーマ

本コースのテーマは「人の行動を心理学から考える」である。前回のサマースクール（吉田・坂本・小池，2003）に引き続き、自分と他人の関係性や集団の中にいる時の行動の共通の法則性を、心理学（主に社会心理学）の立場から体験し、科学的に考える眼を養うことを目標とした。

2. 実施経過

1日目 10:30～11:30 自己とパーソナリティ

1. 授業目的 本授業では自己とパーソナリティに関する基本的な考え方を紹介し、「個」に対する心理学的視点を刺激することを目的とした。
2. 授業内容 ①20答法によるプロフィールカードづくりを行わせた。
②自己概念について解説を行った。
③生徒の回答を見ながら、自己への文化的な影響、自己と発達の間連を紹介した。
④自己知覚理論や社会的比較を紹介、自己意識の形成について解説した。特に、自己という内的な問題が周囲からの社会的影響を受けているという観点を強調した。
⑤帰属のバイアス、セルフハンディキャッピング、自己呈示の紹介を通して、自己のイメージを守ったり積極的にコントロールすることを解説した。
⑥視点を変えて、他者の印象を得る方法について考えさせ、パーソナリティ認知の解説を行った。
⑦パーソナリティの捉え方について、血液型性格判断を導入として類型論、特性論について紹介し、

* 名古屋産業大学環境情報ビジネス学部講師

** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程

*** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程

**** 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

次のパーソナリティの測定方法の解説につなげた。

3. 感想 授業冒頭のプロフィールカード作りを除いて講義形式であったが、感想から授業内容への生徒の関心が高かったことが伺えた。特に、プロフィールカードづくりにより自分がどのような自己概念を持っているのかを知った新鮮さを指摘したものと、文化や対人関係により自己のイメージや表出が変化していることに対する気づきを挙げるものが目立った。後者では、シャクターの感情の自己知覚や割引原理など授業内で解説した研究例に言及する感想も見られた。心理学は私たちの日常の営みをどのように捉えるのか、その講義の最初に「自己」というテーマを選択したが、個人的で内的な印象を受けるテーマであればこそメタな観点から見たときの発見は新鮮であり、生徒の知的好奇心を刺激するに至ったことも考えられる。(坂本)

1 日目 11:30~12:10 バウムテスト・ロールシャッハテスト

(本授業案は、高橋(1974)を参考に作成したものである。)

1. 授業目的 バウムテストを体験してみることによって、心理検査を通して人の心を理解するという臨床心理学の一分野を紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①心理検査の定義・心理検査の種類や歴史、そして心理検査の利用目的について説明を行った(2枚程度のレジュメを配布した)。

②心理検査の1つとしてバウムテストを体験させるために、A4用紙と2B鉛筆を配り、「実のある木を1本描いて下さい」と教示した。

③自分の絵についてどんな木をイメージして描いたのか、また感想等を書いてもらった。それから絵を周りの人と交換し、相手の絵についての全体的印象を描いてから本人に戻すように指示した。

④結果解釈の手順に沿って、全体的印象・空間領域からの検討・形式分析・内容分析・様子や感想などから理解できるところについて解説を行った。そして、解釈する上での留意点について説明を行った。

⑤ロールシャッハテスト：図版の中でコピーした1枚を用い、それを見せながらロールシャッハテストがどのような技法であるか、またそのテストから見ることのできる人の3つの側面について説明を行った。

3. 感想 「自分がなにげなく書いた木が色々なことを示しているということが少しわかった」、「バウムテストの体験はすごくおもしろかったです」等、心理検査を通しての心の理解に興味を示す感想が見られた。(朴)

1 日目 13:00~14:30 記憶

(本授業案は、吉田他(2003)を部分的に改良したものである。)

1. 授業目的 課題を通して、心理学の一分野である認知心理学、及び認知心理学の代表的な研究領域である記憶について紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①記憶課題の提示として、生徒の前で記憶課題となる人物と打ち合わせをするふりをした。5分後、記憶課題となる人物は退室した。

②認知心理学の紹介、及び心理学における記憶という用語の解説を行った。

③「覚えようとしなければ細かい部分は正確に記憶できない」という体験をするため、①の人物の服装・持ち物等を思い出すという課題を実施した。個人で想起させた後、5人前後のグループを作り、個人の想起をグループ内で発表させた。その後、グループでまとめたものをグループの代表者に発表させた。

④記憶課題となった人物を入室させ、想起が不正確であったことを確認した。

⑤「覚えようとしなければ細かい部分は正確に記憶できない」「人間は覚えなくてもどうにかなるようなことはできるだけ省略をする」と解説した。

⑥100円玉課題：「日常よく見ているものでも細かい部分は正確に記憶していない」という体験をするために、100円玉に描かれているものを正確に思い出すという課題を行った。100円玉を正確に想起することの難しさを確認した。

⑦⑥の課題の難しさは、①の課題と同様に「覚えなくてもどうにかなるようなことはできるだけ省略をする」という人間の記憶の特徴と関連していると解説した。また、この特徴は日常よく見ているものにも当てはまると解説した。

3. 感想 「ただ何げなく見た人のことを、ここまで覚えていないとは思いませんでした。けれど、それにも、きちんとした理由があるのだと知ることができました」等、全ての感想が授業内容に沿ったものだった。また、記憶に関する日常的な疑問が書かれた感想もあり、本時の授業内容に対する興味が伺えた。さらに、「グループで話し合うのがとても楽しかった」と集団で課題を行うことの楽しさについて言及する感想が見られた。 (小池)

1日目 14:40～16:00 他者視点取得

(本授業案は、吉田他(2003)を部分的に改良したものである。)

1. 授業目的 発達心理学の代表的な研究である認知能力の発達段階と心の理論(他者の心の中を推察したり、他者が自分とは異なる意識を持つと考えることができる能力に関する理論)について紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①発達心理学という研究分野について解説した。

②3つの山の模型を教卓に置き、黒板側にいる授業者・教卓の横にいる補助者から見える山を想像させ、絵に描かせた。その後、3つの山が置かれている台座を回転させ、正解を確認した。この課題は高校生にとっては簡単だが、子どもにとっては難しいということを指摘し、発達心理学の代表的な研究である認知能力の発達段階を紹介した。

③5コマ漫画(吉田他(2003)参照)を使用して、登場人物の視点に立たせ、登場人物が考えていることを推測させるという課題を行った。具体的には、「プレゼントを届けた郵便屋さんが考えた、子どもが泣いている理由」を考えさせた。

④解説：心の理論、及び心の理論と関連している可能性の高い障害である自閉症を紹介した。

⑤1日を通しての感想

3. 感想 「自分があたり前のようにできていることが、小さいころにはできなかったなんて驚いた」というように、解説の内容及び発達心理学という研究分野についての言及が多く見られた。また、「自閉症のことがもっと知りたい」等、自閉症という障害に興味を抱いたと思われる感想が複

数見られた。

(小池)

2日目 10:00~12:00 心理学とは？

暴風警報が発令されたため、当初の予定を変更した。登校した生徒数が少なかったため、第3コースと合同で「心理学とは何か」等について、生徒に発言を求めながら講義を行った。

2日目 13:00~14:30 対人コミュニケーション

1. 授業目的 対人コミュニケーションについて、スキルと対人関係の進展という2つの観点から紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①社会的スキルの存在を指摘した。日常生活における葛藤を生じやすい場面を提示し、気持ちよくコミュニケーションを交わせるか問いかけ、社会的スキルがコミュニケーションの良好性に関わることがあることを説明した。

②スキルが欠如する場合、どのようなことが起こるか考えさせ、例を示した。

③社会的スキルの特徴、プロセスについて講義を行った。

④対人関係における社会的スキルの機能を考えさせ、解説を行った。

⑤スキルトレーニングの体験を目的として、「頼む」スキルを例にスキルトレーニングを行った。

⑥視点を変え、具体的なスキル以外の相互作用に注目しながら対人関係の進展について紹介した。近接性や自己開示、態度の類似などの要因から対人関係への影響を解説した。

3. 感想 スキルトレーニングについて高い関心を示す感想が多く、スキルという観点から普段の対人関係でのコミュニケーションの取り方について振り返る内容の記述が見られた。また「スキルという考え方をふだんの付き合いでも生かしてみたい」「口調や態度で印象が全然違うので気を付けたい」等、今後の対人関係に積極的に生かそうとする生徒も見られた。なかには対人魅力が個人内の要因のみに影響を受けるわけではないことに対する素朴な驚きを示す感想も見られたが、コミュニケーションの重要性を指摘する記述が大半であり、「人と人との関わり合いをコミュニケーションという視点から見直すことができよかった」との記述も見られる。本授業は「対人行動としてのコミュニケーション」に対する理解を促進するという目的においては効果が見られたと考えられる。

(坂本)

2日目 14:40~16:00 ステレオタイプ

(本授業案は、吉田他(2003)を部分的に改良したものである。)

1. 授業目的 社会心理学の代表的な研究領域であるステレオタイプ(ある集団について人々が抱いている固定化されたイメージ)について紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①課題1:ある人物の情報が書かれた紙(斎藤・小川・坂本・出口・小池・吉田・廣岡・石田, 2002)を配布し、その印象を評定させた。紙は2種類用意され、年齢の違う2人の人物についての情報のどちらか一方が配られた。情報の内容は、一方の年齢にとって典型的なものであり、もう一方の年齢にとっては違和感のあるものである。その人物についての印象を評定させ、どちらの人物に良い印象を抱いたか、理由とともに発表させた。

②課題2：ドクター・スミス課題（吉田他（2003）参照）を実施した。本課題は「医師＝男性」というステレオタイプがあると、回答が困難になる課題である。

③解説：①、②の課題をもとに、ステレオタイプという概念について紹介した。また、ステレオタイプの代表的な例である血液型ステレオタイプ（「A型＝真面目」といった特定の血液型に対する固定化されたイメージ）について言及し、その弊害について解説した。

④1日を通しての感想

3. 感想 「人のもつ先入観というものをあらためて感じた」等、ステレオタイプという概念についておおむね正しい理解ができたと思われる感想が見受けられた。また、ドクター・スミス課題や血液型ステレオタイプを扱ったことで、ステレオタイプが自分自身あるいは自分の身近にも存在することを実感できたようである。 (小池)

3日目 10:00～12:00 集団のパフォーマンス

(本授業案は、吉田他（2003）を部分的に改良したものである。)

1. 授業目的 課題を通して、社会心理学の代表的な研究領域である集団のパフォーマンスについて紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①NASA月サバイバル問題：吉田他（2003）で実施したものと同一。問題シートを配布し、生徒個人で適切な物品5つを選択させた。次に適切な物品について、グループで話し合わせ、選択した物品5つを用紙に記入させた。

②物品の重要度が記された正解用紙を配布し、個人得点・グループ得点を算出させ、グループ得点を発表させた。また、個人による得点とグループによる得点の差を比較させた。

③解説：集団で話し合うと逆に間違えた結論にいたってしまう傾向（集団思考）、集団で話し合うことにより極端な決定をしてしまう傾向（集団極性化）について解説した。

3. 感想 「みんなで考えるのは、とても楽しかったです」等、話し合い自体が楽しかったという感想が多く見られた。また、「相談（話し合い）したことで、悪い結果を導く答えを得てしまうこともあったと知り、驚きました」等、集団思考・集団極性化という現象に驚きを覚えた生徒が多く、「もっと深く学んでみたい」という感想を書いた生徒もいた。(小池)

3日目 13:00～14:30 社会的ジレンマ

(本授業案は、吉田・斎藤・石田・小川・坂本・出口・小池・廣岡（2003）を参考に作成したものである。)

1. 授業目的 社会的ジレンマ状況を経験し、対人行動と社会環境の相互作用に対する理解を深めることを目的とする。具体的には「囚人のジレンマ」ゲームを用いて、社会の中での望ましい行動とはどのようなものかを体験的に理解させる。

2. 授業内容 ①ジレンマゲームの練習課題としてジレンマを伴わないゲームを行い、マトリックスの見方を含めたゲームの仕組みの理解を促した。

②ジレンマゲームを実施し、各試行での選択、ゲーム結果を記録させた。

③ゲームでの選択と結果を振り返りながら、選択の動機について解説を行った。

④このゲームでより高得点を挙げるにはどうすればよいのかを考えさせた。

⑤ジレンマゲームが相互依存を伴う社会の縮図であることを解説し、友人関係におけるプレゼント交換のような事態から社会全体の環境問題まで例を示した。

3. 感想 自分の行動が他者の行動に影響し、また他者の行動が自分に影響を与えるというジレンマゲームの構造が日常の行動にあてはまることに気づいたことを示す感想が多く見られた。また同時に「普段は意識することもなかった」等、生活の中では気づきにくい観点であることを指摘するものも見られた。社会の相互依存性を指摘することについてはおおむね目的に対応した反応が得られたが、本授業の経験を日常に活かすということに関しては、利他性を重視する生徒もおり、利己のために協力が選択されることが社会適応を促進するという現象が完全に理解されたわけではないことが伺えた。(坂本)

3. レポートのテーマ

(1)サマースクールの授業を受けて学んだこと・考えたこと、(2)授業者が用意した資料を読んで学んだこと・考えたこと、(3)名大教育学部に入ったら学びたいこと、または今回の授業内容から日常生活で振り返ることの3点をレポートにまとめて提出するよう指示した。(1)(2)は「対人コミュニケーション」「ステレオタイプ」のテーマの中から1つを選ぶこととした。

4. 全体的なまとめ

「心理学がどのようなことをやっているのかがわかった」といった感想が多く見られた。授業前の質問紙において「心理学がどのようなものか知りたい」と書いた生徒が多かったことから、本コースで生徒の要望にはおおむね答えられたと思われる。一方で、「心理学の考え方・視点が面白い」という感想はあまり見られず、本コースの目標である「科学的に考える眼を養う」が達成できたかどうかは疑問である。本コースの各論的な理解の積み重ねで心理学への理解や興味を促進するという方法以外にも、「心理学」という科学的な方法論を提示することが今後必要であるかもしれない。各授業の形式に関しては、課題にゲームを多用したことで学びやすかったという生徒がいた一方、「もう少し詳しく学びたかった」といったように講義形式を希望していると受け取れる感想が見られた。また、「臨床心理学や発達心理学をもっと学んでみたかった」という意見が見られ、今後この点についても検討する必要があるだろう。(坂本・小池)

引用文献

- 斎藤和志・小川一美・坂本剛・出口拓彦・小池はるか・廣岡秀一・石田康彦・吉田俊和 2002
「社会的志向性」と「社会的コンピテンス」を教育する(3) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 49, 227-245.
- 高橋雅春 1974 描画テスト入門—HTPテスト— 文京書院
- 吉田俊和・斎藤和志・小川一美・石田靖彦・坂本 剛・出口拓彦・小池はるか・廣岡秀一 2003
「社会的志向性」と「社会的コンピテンス」を教育する(4) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 50, 141-164.
- 吉田俊和・坂本剛・小池はるか 2003 高校生を対象とした、「人の行動を考える」視点を養う教育実践 中等教育センター紀要, 3 (2), 31-37.